

特 240

360

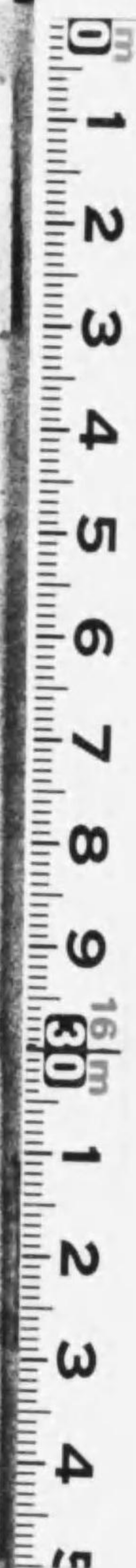
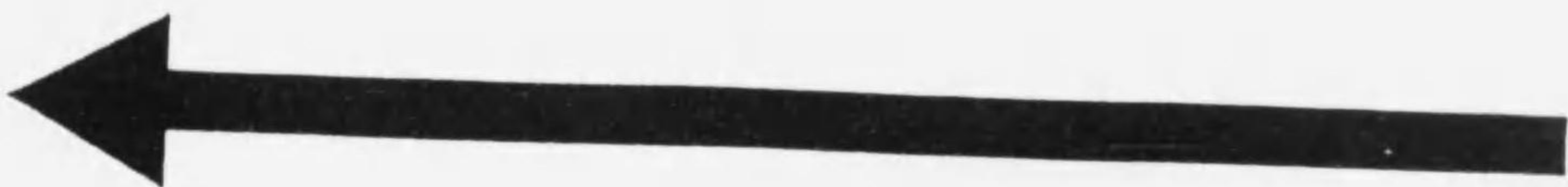
報國會指導書第一輯

我等が産業報國の道

東京自動車工業産業報國會

翻本

始



特 240
360



康 重 木 鈴 長社役締取



社 本 假 川 品

三容偉の社が我三

大森製造所



日野製造所



鶴見製造所

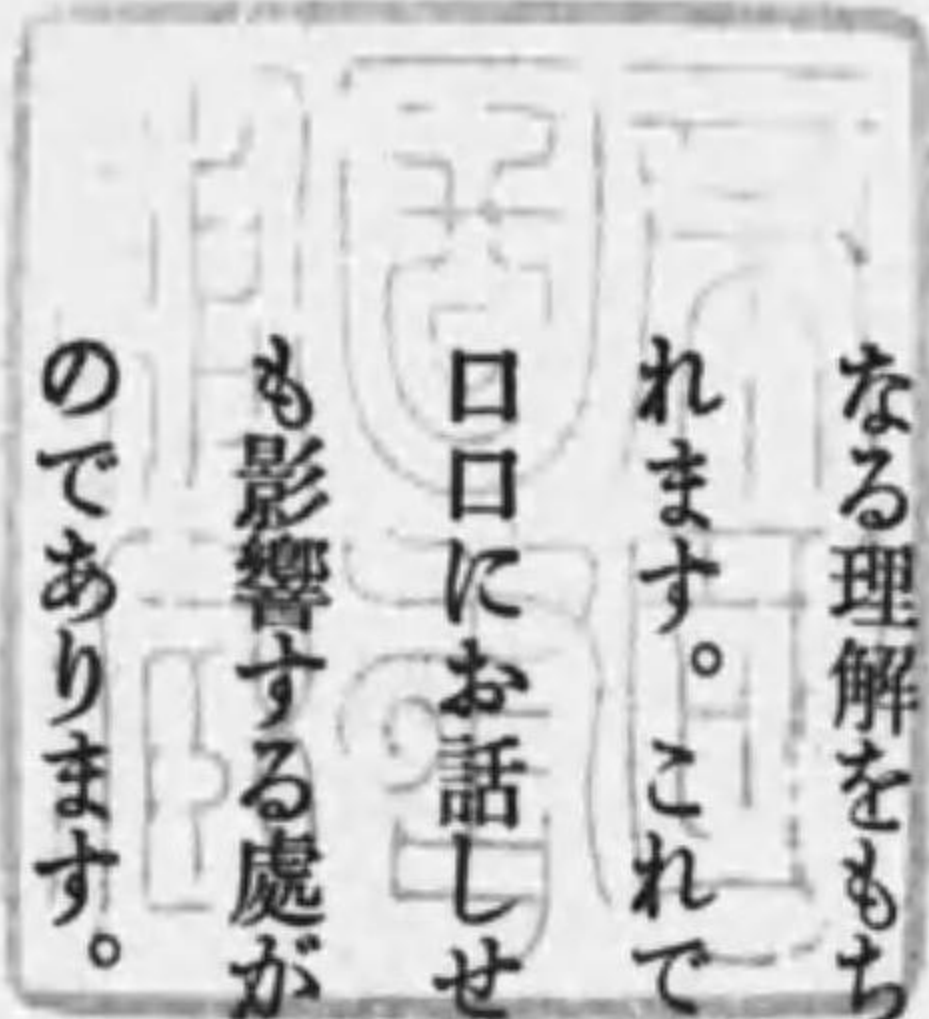
川崎製造所



青年學校專修科



序



本社の現況を通覧いたしまするに、従業員中、未だ産業報國運動に對して充分なる理解をもち其の眞髓を把握して居られない人が尙尠くないやうに見受けられます。これでは各自が常に産業報國運動とか、産業報國精神の徹底とか、折角口口にお話しせられても、其反映が的確にこないで、延いては生産力の擴充にも影響する處が蓋し尠くないではなからうかと内心杞憂に堪へないものがあつたのであります。そこで何とか一般従業員に對して平易に、判り易く産業報國運動の本質を解説して克く之を理解せしめ、以て吾々産業人としての重大なる使命を達成し得られる道しるべになる様にと考へ、本誌を刊行致したのであります。各

自は克く私の意のある所をくみ、充分に其の精神の存する所を捉へ、以てはつきり自己の本分を自覺しまして、皇國産業界に對して吾々産業人としての本分を完うせられん事を期せられたい。

昭和十五年九月

東京自動車工業株式會社

取締役社長 鈴木重康

今回従業員諸君日常の業務遂行の指針とすべく「社訓」を定めました。諸君はよくこの趣旨を體し、その精神を活かし、本會社の使命達成に努力せられんことを切望致します。

昭和十五年九月

東京自動車工業株式會社

取締役社長 鈴木重康

社訓

一本舎社は建國の大義に遵ひ自動車
生産報國の實踐を期す

一本舎社は譽社一體和衷協力事業一
家の經營を期す

一本舎社従業員は礼節と尚び信義と
重んじ頂實剛健以て至誠奉公の風
尚を作興せむことを期す

一本舎社従業員は身體と鍛錬し伎倆
識見の向上を圖り其の職分に精勵
し以て純良なる産業人たらしむこと
を期す

東京自動車工業株式會社

取締役社長 鈴木重康 直

我等が産業報國の道

まへおき……………	一
一、時局認識が徹底しない……………	一
二、産業報國運動の實體……………	二
三、産業報國會の事業……………	八
四、我が社産業報國會の進み方……………	九
むすび……………	一四

我等が産業報國の道

まへおき

昭和十二年七月七日、この日をまさか忘れた人はありませんまい。萬一にもあるならば、その人はこれを讀んで貰はなくて結構です。何故かと言へば、そんな人は日本人たる資格がない、日本人たる資格のない人に日本精神に基く産業報國精神を説いても馬の耳に念佛だからです。

支那事變勃發の七月七日は分つてゐるが、どうもこの頃面白くない、物價は高いし、品物はないし、米は外米だし、やれあれもいけないの、これもやめろのと全く面白くない、癪だと思つて酒を呑めば水臭いと来て居る。馬鹿馬鹿しいから、工場でせい／＼氣を抜いて、なまけ／＼働くより仕方がないやといふやうなことを考へてゐる人もなきにしもあらずであらう。なければ幸ひだが、ともかく今一度、軍需工場従業員としての認識といふか、自覺といふか、さういふものを検討して見ようではありませんか。

一 時局認識が徹底しない

事變が起つてからもう滿三ヶ年経つたが、未だ時局に對する認識が足りない。贅澤を止める、遊興するな、などと喧しく言はれてゐる。

『抑々支那事變の目的は、東洋の安定を亂す蔣介石政權を庸懲し、以て東亞新秩序を建設せんとするにある』などと大きな聲で叫んで見たところが、諸君は先刻承知のところ、『よつて我々國民は舉國一致難局に處し、勇往邁進しなけ

ればならないのである」と言ふ結びの文句迄暗誦してしまつてゐる。どうせおきまり文句だ、言はなくても分つてゐる、何度言つたつて同じだと逆にするさかられ兼ねない位である。さて、しかし實際心の中でさう思つてゐる人は果して、分つてゐるさと言へるだけの行ひなり、言ふことなりをしてゐるであらうか。

我々は今一度自分の胸に次の如き問を發して見よう。

戦争は軍人だけがやつてゐるのだらうか。

戦争の相手は支那だけなのだらうか。

戦争はぢきに終るのだらうか。

前線の將兵は我々と同じやうに、暑ければ水を飲む、腹が減ればすぐ菓子でも食べられるのだらうか。

我々の職場からも随分多勢の應召者を送つたが彼等は今どうしてゐるだらうか。

答は掲げない。諸君のよく知つてゐることであるし、折に觸れ想ひ出して自問自答して呉ればよいのである。

二 産業報國運動の實體

一昨年あたりから産業報國、産業報國とよく言はれるが、講話などを聞いた時は分つた様な氣がしても、あとで考へて見ると何だか腑に落ちない、どうも正體が掴めないと言ふ人も多からう。

産業報國運動が盛に説かれ出したのは、昭和十三年の初めである。産業報國聯盟といふものがつくられて、この運

動が全國産業界に擴大して行つたのである。最初は従來勞資間の調整を使命とする協調會が主唱したのであつたが、政府も之に對して積極的な助長の方針を採るやうになり、今は一つの國策として實施されてゐるのである。

我が社でも、これに應じて製造所毎に産業報國會が結成された。鶴見が十四年の二月十日、川崎が三月十日、大森が八月三日、品川が九月五日であつた。盛大な式が行はれて、宣誓したり、講演があつたりしたが、何だかよそ事のやうな氣もする。その役員員の集りなど時々あるやうだが、内容は知らないし、又知らうとも思はない。人に説明を

求められたところが、さて何と答へてよいか一寸返答に困るといふ頗る無關心な人も相當あるであらう。

では、どうしてかうよそ事のやうなのだらうか少しづつ考へて見たい。

(個人主義・功利主義)

先づ産業報國精神といふことを盛に云はれるが何だかピンと來ないものがある。

「勞資一體、事業一家ノ實ヲ舉ゲ、産業ヲ通ジテ國ニ報ズル」

などと説明されてゐるが、どうしたら勞資一體なのか、事業一家なのか。我々は資本家に使はれてゐるのだ。會社とは自分達の相手方で、減多にいゝやうなことはしてくれない。給料なんかの不平は



川崎産業報國會發會式の状況

どん／＼持込んで要求しろ、聞いてくれなければ罷めてしまふか、行き掛けの駄賃に腕力の一つも振つてやれなどと考へる。

我々は毎日々々朝早くから汗みどろで働いてゐる。一體何のために働いてゐるかよく考へて見たことがあるだらうか。聞かれて突差に答へんとすれば、「俺は給料を稼ぐ爲だ、とにかく働かなくては食へんからだ」と答へるであらう。勿論働かなくても一生涯食べてゆける人があつたら、それは働く必要はあるまい。然し、それは世界中でも極く少数の特殊な人であつて、殆んど誰も彼もが、それ／＼の地位に於て、それ／＼の職務を持つて働き収入を得て暮してゐるのである。だから、働くことは収入を得る手段には違ひない。然し、収入を得ることが働くことの全部の目的ではないのである。若し収入を得ることが働くことのすべての目的であつたならば、泥棒も一つの立派な職業であるわけである。又、日本に居て収入が思はずなれば、重慶の蔣介石の軍需工場へ行つて働くもよし、英國のスパイの手先になるもよし、色々収入を澤山得る方法はあるだらう。何か事業を起さうといふ人についても同じことが云へる。然し、恐らくこんなことを考へる人はあるまい。さういふことをしたら罪になるからといふのではなく、日本人として出来る筈がないのである。

これで働くことは収入の全部の目的でないことは分るであらう。然し人間はつい目先の慾に捉はれ勝ちで、ともすれば誤つた考へを抱いて不平を並べ易いのである。

ところで、かういふ考へを多くの日本人がこれ迄持つて來てゐる。これは全く明治から大正へかけて、激しく流入して來た外國の思想——個人主義・功利主義・自由主義・唯物主義・物質主義——色々々の角度から色々々の言葉で現はされるが、ともかく歐米の文化を採り入れることにあせつて、その取捨を誤つたために滔々として流れ込んだ外來思想のなせる仕業である。

かう考へ方が間違つてゐることは、事變前ならばいさ知らず、現在の如き重大時局に及んで、今更指摘する必要はないであらう。

(爭議)

一方資本家——事業主も個人主義・功利主義思想でやつてゐたから、全く自分の金儲けのために事業を始めたものである。だから労働者の働く力を金を出して買ふのだといふ考へ方であつた。即ちなるべく安い價(安い賃金)で買ふ。いらなくなれば首を切る。利益が上らなければ工場を閉鎖してしまふ。要するに事業をするのは金儲けのため、そこで働くのは自分が食ふため、お互の目的が全く離れ／＼であり、利害は相反して敵味方といふ形になつてしまふ。どうしてこゝに争ひが起らずにゐようか。事實大正から昭和へかけて、大小さま／＼のストライキが起つた。これは殆んど賃金値上要求である。そしていきなり仕事を止めて、團體を組んで示威をやる、暴れる、器物を壊す、群衆心理といふか、皆が皆、良いことは考へて居なくとも勢を恃んで不法なことをしたのであつた。そして實際、労働階級は資本家に壓迫されてゐる無力なものだから、ストライキは闘争の唯一の方法だと常識的に考へられてゐた時代さへあつたのであるから、今から考へて見ると不思議な様である。

かういふ考へ方も皆前に述べたやうな外國流の思想に災ひされた誤れるものであつた。而も功利主義・物質主義から更に突き進んで、恐るべき共産主義——いはゆる赤化運動となつて現れたのであつた。これは國家の支配を人民に移すといふことになるので、皇統連綿たる我が國體と相容れざること明白なものである。にも拘らず、多くの人が、誇大な宣傳に乗せられて、上のやうな思想を無比判に信じ切つてしまつた。その結果が、第一次歐洲大戰による好景氣の反動が襲つて大正末期からの不景氣時代に入り生活の不安が感ぜられるに及んで激しいストライキ等となつ

て現れたのである。

（目標は國家の利益）

このやうな險惡な時代が続いたあとで、昭和六年の滿洲事變が起りこの邊から次第に「日本固有の精神」に目覺めはじめ、その方の運動も起りはじめたのである。そして今度の事變に及んでは、從來の觀念や、行動を以つては到底解決し難い非常時局となつて來たのであり、そこに産業報國運動といふものが燃え上つて來たのである。主義がどうの、思想がどうのといふ問題を越えて、この日本の國の狀勢がどうしても、さういふ精神によつて考へ直し、出直さねばならぬといふ必然的な過程に追ひ込まれて來たのである。だから労働争議とか、労働運動とか言つて、労働と資本とを對立させて考へるなどといふことは出来なくなつて來たのである。労働團體といふやうなものもその存立の根據がなくなつて、存在を許されなくなつてしまつたわけである。「いや、俺は矢張り労働は對立したものだ」と考へると力んでみたところが、根據のない主張は夢のやうなものにすぎない。

かくして労働は協調せねばならぬといはれた嘗ての考へから、進んで、労働は一體である。そこに區別すべきものはない。上は社長から下は少年工員に至るまで、各自が受持つ仕事の種類が異り、程度に差があるだけで、目標は唯一つ「國家の興隆に寄與する、殊に我々軍需工業従業員は堅き國防國家の建設に寄與する」といふ尊い目標に向つて毎日の職務を遂行してゐるのである。

勿論生活を維持するためにそれ相當の収入は必要である。然し、前にも言つたやうに、働くことは収入が唯一の目的ではない、我々は大本帝國の臣民の一人である。毎日暮してゆけるのは、この國に生を享けたからこそである。さうすれば、自分の生きることは即ち國家の生命を活かすことであり、正しく生活し、正しく働くことによつて、國

家を愈々繁榮ならしめなければならぬことは全く自明の理と言はねばならぬ。

現在の工場事業場で最初は古い思想の下に經營をはじめたものが多からう。又働いてゐる人も、収入のみを目的として入職した人が多からう。そして、この事變以來産業報國運動が湧き起つて來たために、趣旨は分つてゐながら、何か意地になつて昔の思想を墨守しようとする氣持がないとは言へない。然し思想の變轉は滿ちて來る潮の如きものである。うかくとして居れば足元を浚はれて立つてゐることが出来なくなるであらう。

以上述べたところによつて、最初の間であつた「労働一體……産業ヲ通ジテ國ニ報ズル……」といふ意味も自然理解されるであらう。とにかく、産業報國精神が分り難いものだといふのは、その人の頭の中が未だ事變前の舊い考へ

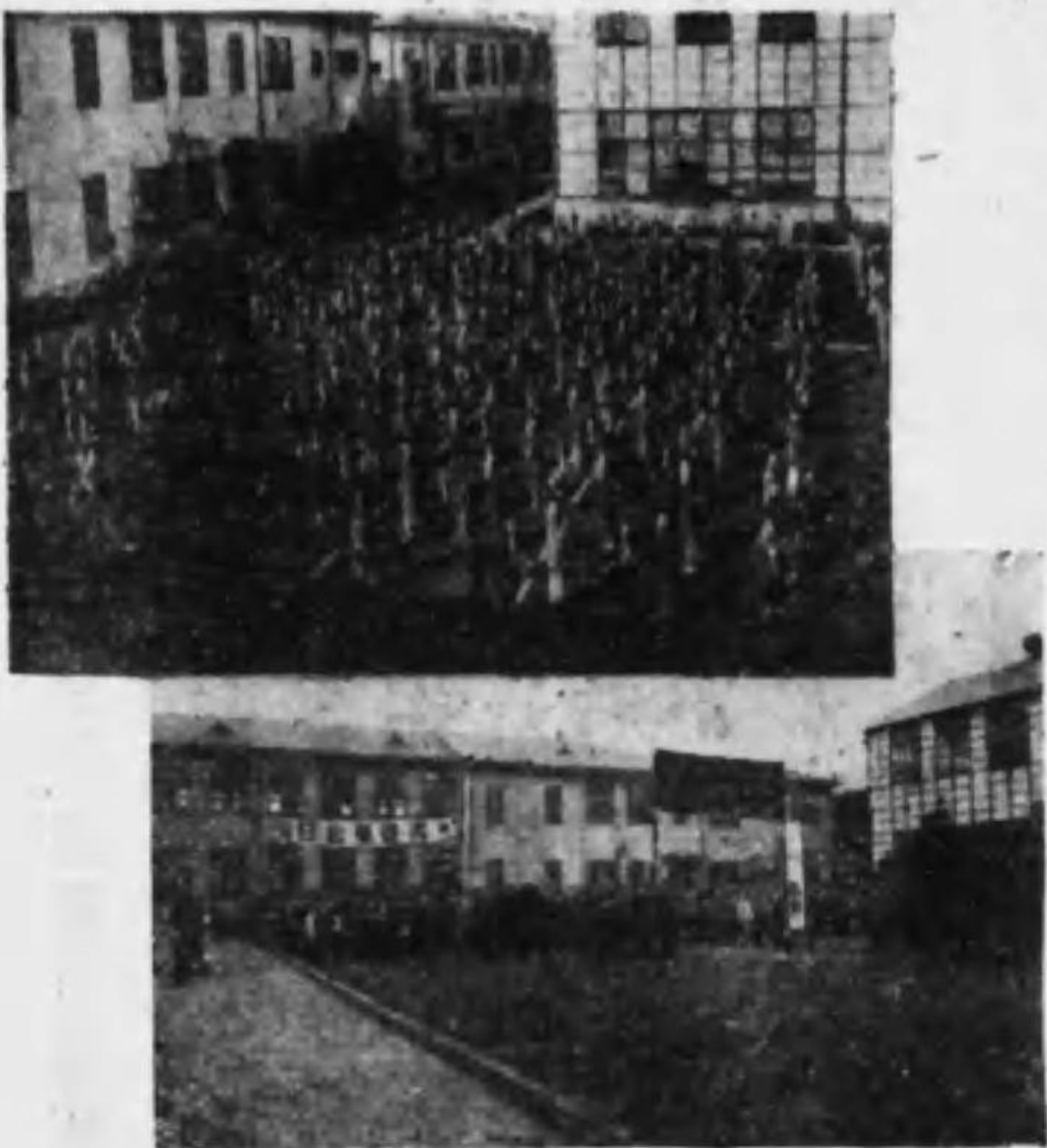
方に凝つてゐるからであつて、先づその考へ方の誤りを修正してかゝらなければならぬ。

では、産業報國精神を呑み込んだ頭で今一度次の如き問を自問自答して見よう。

資本家と労働者とは仇同士であるのか
事業主は自分の利益だけを上げればい

ゝのか。
労働者は自分の懐さへ温くなればい

のか。
個人と國家とは別個のものであるのか



と事行日公奉亞興の會國報業産見鶴
動運鍊鍛身心民國

三 産業報國會の事業

産業報國會運動も分つた。産業報國會精神も分つた。では實際にどんな事業をするのだらうか、我が産報會にも福利部とか共済部とか、銃後後援部とか色々あるが、名前が變つただけで、することは今までと少しも變りないじやないか、産報會とは福利事業の代行機關なのかなといふやうな疑問が又一つ湧いて来るかも知れぬ。それはまた表面だけ一寸見て内容の認識に徹しない人である。成程從來のその種の仕事は産報會が引繼いでやつてゐる。然しそれが産報會の仕事の全部ではない。肝腎な點は我々全部がこの産報會の會員だと自覚する點にある。産報會の福利事業の利益だけ受けて、あとは他人だといふやうな態度はこれこそ個人主義・利己主義の觀念である。

常に産報會員たるの名譽を重んじて、苟くも前にのべた精神に悖るやうな行爲をすることは出来ない。この精神で行ひ、且福利の利益を受けてこそはじめて、受ける價値があるのである。何事も「佛作つて魂入れず」では何にもならない。産報會の事業の成功不成功は即ち自分達會員たるものの名譽に關することである。だらしのない行ひをする人があつたなら、即ち自分が非難されてゐるのだと感じ、お互に訓戒し合つて、向上發展に努めねばならぬ。これが即ち産報會事業の眞意義である。

産報會の重要な事業に懇談會制度がある。これは日常業務に追はれ勝ちで、會社工場内の上下の關係が疎遠になり勝ちである。放置しておけば、上は下を、下は上を夫々信用出来なくなつて、それこそ勞資對立などといふ思想が湧いて元の空阿彌となる惧がある。こんなことがないやうに、適當な時期を選んで、上意下達、下意上達、以つて和氣霽々の裡に、明らかな氣分で仕事を命じ、又命ぜられるといふ氣分を養はうとするもので、産報會の功績の上と上がらざるとは、この懇談會の運営にかゝつてゐると言つても過言ではない。産報會事業の眞意義を解するならば、この點

の危惧も亦解消するであらう。

四 我が社産業報國會の進み方

我が社各製造所には昨年産業報國會が出来た。社長以下全従業員を以つて組織されてゐる。我々は皆その會員である。常に會員たるの自覺をもつて居らねばならないのに、中には果して自覺してゐるかどうか疑はしい人もありさうである。それは産報會と自分を離して考へるからさうなつてしまふ。自分がその一員なのだから、事業などを批判する前に果して自分が産報會員たるに恥ぢない言動を取つてゐるかどうか反省して見なければならぬのである。

我が社産報會の綱領を読んで見よう。これ即ち我が産報會の進み方を示したものである。「何々ハ何々スベシ」といふやうな文句が並んでゐると、つい読み流してそれつきりにし勝ちである。しかし、これは我が社のものだから、他人扱ひしないで、もう一回よく味はつて読んで見よう。

一、本會々員ハ建國ノ大義ニ遵ヒ、各々其ノ職分ニ恪遵シ、自動車報國ノ實踐ニ努力スベシ

○建國の大義に遵ひ とは即ち日本精神に還れといふことである。明治以後に流入した外國思想から脱却して

日本固有の精神に還らねばならぬ。日本固有の精神とは天照大神の下し給つた三つの御神勅である、

第一は天壤無窮の御神勅で天孫瓊瓊杵尊に下し給つたものである。

「豊葦原の千五百秋之瑞穂國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり宜しく彌皇孫就きて治らせ 行矣 寶祚の隆へまさんこと當に天壤と窮りなかるへし」

第二は齋鏡齋穗の御神勅である。

「此の鏡は専ら我が御魂として吾が前を拜くが如いつきまつれ」
第三は神籬磐境の御神勅で同じく天孫降臨の際臣下としてお件申した神々に對し高皇產靈神から下されたものである、即ち、

「吾は則ち天々神籬及び天々磐境を起樹てて當に吾孫の爲めに齋ひ奉らむ汝天ノ兒屋命太玉命宜しく天々神籬を持ちて葦原の中々國に降りて亦吾孫の爲めに齋ひ奉れ」

日本は神國である。天照大神から神武天皇の建國以降、實に二千六百年の汚れざる歴史を有する我が國に比すべき國が何處にあるか。神國たるの證據はこゝにある。一時外國流の思想に災ひされたと言つても、普通の國なら革命に迄なつてしまふところを再び、崇高な日本精神が湧き上つて来る、日本人が芯まで腐らないし、これ神國の國民たる證據である。

○各々其の職分に恪遵し とは前にも述べた如く、勞資は對立したものではない。又別々の目標に向つてゐるものでもない。社長も、重役も、課長も、技師も、組長も、見習工員も、皆夫々の仕事に差があるだけのことで、

目標は唯一つ國家の利益に寄與するにある。組長の仕事は面白さうだと言つても、見習工員で入つた人がいきなり組長になれるわけではない。今組長である人も最初から組長だつたのではない。夫々努力勉勵して今日の地位を得られたのである。又或る人は學校を出てゐるから出世した、出てゐないから駄目だなどと頭から決めてかかつてゐる人もある。これ亦自分をあまり安く見過ぎてゐる。人間はもつと自尊心を持たねばならぬ。成程人間は學校教育によつて知識をつけられるであらう。然し、たゞ時間の運速、方法の難易が若干あるだけで、殊に人格の完成に至つては學校教育のみによつては得られない。世の中で最も輕蔑すべき人は、「自分は最高の學校を出たのだから遊んでゐても偉くなれるだらう」と考へてゐる人と、「自分は小學校しか出てゐないからどうせ出世なんか出来やしない」と自らきめてゐる人間とであると思ふ。

昔豊臣秀吉は、どうして出世したかについて、自分は

最初織田信長の草履とりであつたが、その時は日本一の草履とりにならうと考へて勵んだ。足輕だつた時は日本一の足輕にならうと考へた。侍に取立てられた時は日本一の侍にならうと決心した。そして現在の地位に迄達したのだと家來に語つたといはれる。

双葉山も最初から横綱ではない。襷摺りから始めて努力の結果あのやうになつたのである。勿論人間には運命といふものがある。運の良い悪いによつて差が出来るが、これは全く天命であつて人力の及ぶところではない。

い。然し運命も或る程度迄自己の努力によつて打開し得るものである。俺は運の悪い人間だからと言つて怠けて居ればなほ悪くなるばかりである。人事を盡して天命を待つといふが、天命に従ふ前には先づ人として出来るだけの努力を盡さねばならぬ。人事を盡したといふ安心があれば、結果は平然と待つことが出来るのである。己の職分を盡せとはかういふ意味である。

○自動車報國の實踐に努力すべし とは我々のたづさはつてゐる仕事は自動車類の製造である、車輛類が

兵器として如何に重要な役目を持つてゐるか、快速部隊等の名で知られてゐるから説明は要しない。軍の機械化の重要部分には車輛類の充實にある。獨逸の快勝も飛行機に加ふるに地上の兵器車輛の活躍に待つところが多しと思はれ



兵 器 車 輛 の 活 躍

る。要するに我々は、自動車の生産に全能力を上げることによって、國家に報ずるといふのがこの趣旨である。

一、本會々員ハ一心一體父子ノ情誼ヲ以テ相信和スベシ

○凡そ人間の情の中で親子の情程深く且廣いものはない。親子の情は人間ばかりではない。「燒野の雉子、夜の鶴」といふ諺がある。鳥獸も子を思つて鳴くの譬を言つたものだが、人間に於て親子の情を解しなければ、鳥獸に劣るといふものである。これは會社といふ一つの團體に於ける縦の關係の緊密化をなすものであつて、指導する者、せらるゝ者が親子の情によつて信じ合ひ、融和せよと言ふことである。我が大君が「義は君臣にして、情は父子」と仰せられた大御心を私共は朝夕奉體實踐すべきである。古の兵法に「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と言はれてゐる。時節や、地の利が如何にうまく出来てゐたとしても、味方の氣持がびつたり和してゐなければ戦ひに勝てないといふのである。實に人の和こそは産業報國運動の基調である。

一、本會々員ハ常ニ禮節ヲ尚ビ、徳性ヲ涵養シ質實剛健以テ體力技能ノ向上ニ努ムベシ

○禮節を尚び徳性を涵養しとは上下、相互間の禮を重んじ、人格をつくるといふことである。「鳩に三枝の禮あり」と言つて、鳩ですら目の鳩とは三つ下の枝に止るといふ。人間に於ておや。又「親しき中にも禮儀あり」と言ふ。例へば朝晩の挨拶、物の貸借の場合、食事の時、すべてたとひ親しい中にも禮儀がなくば人間として恥づべきである。會社の外でも例へば電車の乗り降りの際などの浅間しき、我ら産報會員だけはそんな振舞ひをしまい、否世間の人達を指導するやうにありたい。「人が押しのけようとするから、俺も押のけるのだ」では、利己主義・個人主義に引き込まれたのであつて産報會員たる資格ゼロである。良い事と悪い事は判別出来るくせに、實行が出来ないの

は、修養が足らぬ、意志が弱いといふものである。

○質實剛健以テ體力技能の向上に努むべし

従業員である。その我々が質實剛健でなくて、どうして第一線に役の立つ魂の籠つた兵器が出来ようか、健全なる魂は健全なる肉體に宿るといふ。健康が重要な要素であることは言ふを得ない。我らは技術を以て國に報ずる以上、技能の向上に努むべきは之亦説明を要せぬところである。

一、本會々員ハ互助共濟共存共榮ノ實ヲ擧揚スベシ

○世の中は相持ちである。會社の如き團體に於ては殊に然り。自分勝手な振舞ひは許されない。「一樹の蔭、一河の流れ、袖觸れ合ふも他生の縁」といふ言葉があるが、同じ工場で同じ自動車の製造に従事するといふことは實に浅からざる因縁に與はれてゐるものと言はなければならぬ。我ら産報會員たるもの俱に俱に助け合はなくてはならぬ。前にのべた人の和の尊さはこの點に於て發揮されるのである。産報會員の共存共榮は、即ち會社の繁榮事業の繁榮となり、結局國富の増進、我々軍需工業の場合には國防の完成といふ風に、



へ 轉 運 試 ! 爽 颯

池に小石を投げ込んだ波紋がだん／＼擴がつてゆく様に大きな影響を持つものであることを銘記しなければならぬ。

産業報國といふことを、正面から解説して見たところが、大抵の諸君は身にタコが出来る位聞かされてゐるから、意味が少いと思つて、諸君の抱きさうな疑問を提出しつゝ、記して見た。賢明な諸君は、既に言葉の意味は知つて居る筈であるから、更に一步進めた理解の助けとなしたいと期待して叙述したのである。

最後に一つ産業報國精神實現の方法として「産業報國朝晝晩」といふことを提唱しておきたいと思ふ。

(朝)

夜が明ける。すがくしい空の中、太陽が昇る。

「早起きは三文の徳」だ。官城道輝、神前佛前に今日も無事に工場のとめを終へられるやうに祈念する。

人は我等を産業戦士と言ふ。戦士ならば、朝の出動は正に出征兵士の出陣である。

驛の改札口の混雑、電車に乗る押し合ひ、これでは戦士も憂無しだ。前線の兵士が混雑して揉み合つてゐたら、忽ち敵の機關銃に一掃されてしまふだらう。何とかならないものか。産業報國會員たることを自覺したらまづ自分から秩序を守らう。

工場の門をくゞる。「お早う」機械にも「お早う」と聲をかけた。朝つばらから不愉快な顔をしてゐる人は居ないかな。人の顔色をうかゞふ前に、さうだ先づ自分の顔を想像して見よう。始業前のラヂオ体操をやつてゐるところでは、眞つ先に飛出して、一、二とやらう。體位向上であり、團體訓練の一つだ。皆と一緒に元氣よく。

始業のサイレン、モーターの回轉、朝だ。一日の能率は朝の氣分に左右される。

(晝)

晝食のサイレン、食堂にかけつける。食事は腹をふくらますためだ。然し、毎日かうやつて満足に食べてゆけることに感謝の念を持たねばならぬ。静肅に、よく噛んで、食事を亂雑にする者は、人格が粗暴な證據である。

午後二時、三時何だか眠氣がさして来る。手がゆるんで来る。機械の蔭にしゃがんで、隣近所の人と無駄話をはじめる。いけない、生産量が減る。前線の將兵は敵と對峙して、新車の補給は未だつかぬか、部品の供給は未だ來ないか」と、苛立ちながら、首を長くして待つてゐるのだ。どうして遊んで居られよう。

前線の將兵が野越え、河越え進撃してゐるやうに、我々も次から次へ緊張した氣持で生産に努力しなくてはならぬのだ。

今は物資が不足だ。消費節約せねばならぬ。たとひボロでも、油でも、無駄な使ひ方をしてはならぬ。何とも思はずやつてゐることも、頭を働かして工夫したら、もつと節約になることがいくらもありさうだ。さうだ、頭をぼんやり遊ばしておく時があつてはならぬ。常に工夫だ。研究だ。

(夜)

終業だ。サイレンの響と共に工場の門を飛び出す。あッしまった、また機械に「さよなら」と言つて來るのを忘れた、今日も一日調子よく動いて能率を上げて呉れたあの可愛い機械に明日こそは忘れず「さよなら」と挨拶して歸らう。

眞直家路へ、歸りがけに一杯飲まうと誘はれたが斷つて歸る。勿體ないことだ。無駄な消費だ。飲む金があつたら貯蓄しよう。貯蓄は産業報國の大きな要素だ。愛國貯金の積立高も何とかして殖してゆきたいものだ。生活の新設計を考案して見よう。夕餉の膳につきながら色々考へる。

一家揃つて圍む夕食の食卓、日本の家族制度の有難さ、年寄も小供も和やかな空氣の中に四方山の話に花が咲く。

405
348

餘暇には娛樂も必要だ、然し無駄な消費を伴ひ勝ちだから、なるべく最少限度に止めて、餘暇は専ら知識の吸収に努めよう、新聞は毎日必ず眼を通さう。時局は日にく大きな推移を見せてゆく、うつかりしてゐては、産報會員たるもの飛んだ耻をかゝぬとも限らない。又日常の業務に關する知識もなるべく廣く貯へて置かう。一日の計が朝にあると共に、一日のしめくゝりは夜にある。さて今日の一日も正しく強く明るく暮せたであらう、靜かに反省して見よう。

孔子は日に三度その行ひを反省したといふ。我ら凡人は一回でもいゝから、省みたいものである。反省のない人間には進歩もない。丁度熊が折角獲つた鮭を、先を結ばぬ笹の枝に通して擔いで行くので皆落してしまつたといふ偶話と同じこと、結局は失意と墮落の淵に陥るのみである。

産報朝書晚、一日を省みて耻かしからぬ行ひをなすことが、一日の時々刻々が、産報國精神の實踐である。自動車はスピードが生命だ。スピードが生命の自動車生産に従事する産報戰士の活動がスローモーションでは耻さらしだ。

行かう、我れらの産報會員、産報國の大道を、まつしぐらに、フルスピードで。

昭和十五年九月二十六日 印刷
昭和十五年九月二十九日 發行
我等が産報國の道 非賣品
編輯兼 東京市品川区東品川五丁目六一番地
發行人 田坂政養
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一丁目一一番地 村尾一雄
發行所 東京市品川区東品川五丁目六一番地
東京自動車工業株式會社内
東京自動車工業産報國會
刷印社會株式會社刷印本日大

終

